

3月に群馬県で全日本スプリント選手権が、5月に広島県でロングディスタンスの全日本選手権が開催されました。道場主がそこで考えたこととは…。



優勝の言葉を語る道場主・松澤俊行
2012年5月4日 全日本大会

問われる知識、モラル、経験

全日本スプリントにおいては、競技運営上、深刻な問題が生じました。ここではその問題についての細かな言及は避けつつ、思うところを述べます。

※問題については、藤島由宇氏が詳細に検証しており、オリエンテーリングニュース上に記事が掲載されています。
<参考記事アクセス先>

<http://www.o-news.net/2012/03/20111.php>

国際オリエンテーリング連盟(IOF)が定める原則に基づき、日本オリエンテーリング協会(JOA)も「コース設定の原則」を示しています。そこでは、大原則として、

- ・走りながらナビゲーションするというオリエンテーリング独自の特性
- ・競技の公正さ
- ・競技の楽しさ
- ・野生動物および環境の保護
- ・メディアと観客のニーズ

の5つが挙げられています。

今回の全日本スプリントでは、ホテルの保護のため、地図上では立ち入り可能と記されている小川部分が急遽立ち入り禁止とされました。しかしその禁止が徹底されず、「競技の公平さ」と「野生動物および環境の保護」、2つの原則が守られませんでした。競技者も運営者も、各自が考える最善の行動をした挙句、不具合が生じただけに、非常に残念な印象を与えました。ただ、たとえ当事者に悪気はなかったとしても、不公平で、環境に損傷を与えるような競技では、競技者も観客も楽しめませんし、メディアにも相手にされず、競技自体の存続も危機にさらされるでしょう。

ナショナルチーム合宿では、定期的に日本アンチ・ドーピング機構から講師を招いて講習を受けています。ある年の講習で、講師の方が冒頭に言っておられた言葉が印象に残っています。

「なぜ、ドーピングをしてはいけないか。不公平だから、身体に悪いから、いろいろな理由が挙げられますが、こうまとめることができます。ドーピングがまかり通るようなら、『スポーツがなくなる』から。」

ドーピングが横行するようなスポーツ界には、誰もが関心を失ってしまう。ドーピングをすることは、本人の生命だけでなく、スポーツ全体の生命を危機にさらすことだ。そのようなお話でした。

これと似たように、競技の公正さが保たれず、かつ環境に害が及ぶとしたら、スプリントオリエンテーリングはなくなってしまう、という考え方もできます。問題の再発は全力で防がなければなりません。知らず知らずに立ち入り禁止区域に入ってしまったとしても、裁定上その選手は咎められなければならないでしょう(ドーピングも「知らなかった」では済まされないことはご存知の通りです)し、競技の公正や環境の保護を考慮した際に、不適切といえるコースが組まれたとしたら、仲間内で不平を言い合うだけでなく、公式な申し立てによって運営側への指摘がなされなければならないでしょう。

スプリント種目が発展し、メディアや観客の関心も得て、オリエンテーリン

グの認知度を高めることに成功している国(言うなれば「オリエンテーリング先進国」)では、その過程で生じた問題に、関係者が都度全力で対処してきたからこそ、成功が得られたものと推測されます。オリエンテーリング先進国でのスプリントオリエンテーリングに出走するという経験に恵まれ、その魅力も、裏に潜む問題を肌で感じて来ているナショナルチーム関係者には、日本国内で率先してスプリントの持つ魅力の伝達や問題の解決に取り組む姿勢が求められています。

かくいう筆者は、昨年フランスで開催された世界選手権のスプリント予選(市街地での開催)で、観戦エリアの立ち入り禁止区域に踏み込み、失格となりました。その一方で、国内のスプリント大会では上位を獲得することも多く、周囲に与える影響も少なくない身ですので、果たすべき使命を認識すると同時に、重い責任を感じています。

「イメージ先行」の罠を回避する

全日本スプリントが終わって放心的のも束の間、一月半後の5月上旬には「伝統」のロングディスタンス種目での全日本選手権が待っていました。レースの結果と、内容に対する考察は他の記事に譲ることにして、準備状況を振り返りたいと思います。

今年全日本準備で特筆すべき点は、直前に世界選手権日本代表選考のための「選抜合宿」が実施されたことです。2回、合計4日間に及ぶ合宿中では、特定のメニューが選考対象レースとなるのではなく、様々なタイプの「検定コース」により、各選手の体力と技術の水準が測られました。以下が、その全メニューです。

◇ 4月21日(土)「栂の湖」

- ① ロングレグ(1000m×2本)
- ② ライン O(3800m)
- ③ ルールへの理解度を問う筆記試験

◇ 4月22日(日)「栂の湖」

- ④ ミドル O(4000m)
- ⑤ クロスカントリー走(4900m)

◇ 4月28日(土)「こどもの国(勢子辻 桐)」

- ⑥ コントロールピッキング(3000m)
- ⑦ ライン O(3500m)
- ⑧ クロスカントリー走(4350m)

◇ 4月29日(日)「鳥追窪」

- ⑨ ロングレグ(1200m×2本)
- ⑩ ミドル O(4100m)

ご覧の通り、第二週の合宿と全日本選手権は僅かに中 4 日でした。多彩な課題のオリエンテーリングを直前にこなした後だけに、潜在能力が覚醒され、まさに引き出されようとしている状態で全日本大会を迎えようとしている、という感触がありました。

さらに、中 3 日の 5 月 3 日には、山川スペシャル(山スペ)スプリントが行われました。このスプリントでは、「コントロール脱出時のルックアップ、ルックファー、ルックア라운드。後の進行を楽にできる特徴物を見落とさない」という、他種目にも役立てられるようなテーマを設定して走りました。部分的にヤブの中の直進が問われたこともあり、充分翌日の対策になったと思えました。そして、実際に全日本大会では力を発揮できました。

上で、「潜在能力が覚醒され、まさに引き出されようとしている状態」と、少し持って回った表現をしました。これは「放っておくと潜在能力は発揮されない」という認識に基づいた言い回しです。ある意味当たり前ですが「我が事」となると、なかなか認めにくい、認めたくない話でもあります。

スポーツは中級者以上になると、週 1 回の練習では上達が難しくなります。潜在能力としては維持されていても、表に出るパフォーマンスは上がりにくくなります。その人にとって、前回のオリエンテーリングが一週間以上前だとしたら、前回より潜在能力が引き出されやすい状態でスタートに立っていることはまずない、と考えて良いでしょう。それでいて、過去の甘美な記憶に惑わされ、「今日はいけそうな気がする」と根拠がない自信を持つとしたら、始末の悪いことになります。

「練習の間隔が空いているとしたら、イメージ先行の状態です。スタートを迎えるはず。イメージと動作を一刻も早く近付け、かみ合わせるために、スタート直後は手堅く滑り出す。そして、イメージと動作の間に齟齬があるとしたら早く気付いて、修正していく」。そう意識してレースに臨むようになってから、筆者のパフォーマンスは安定度を増したように思います。また、十分に練習をした直後に迎えたレースには自信を持って臨めるし、イメージと動作もかみ合いやすくなったような気がします。

今回の全日本選手権は、選抜合宿のおかげで、まさに「十分に練習をした直後に迎えたレース」でした。今後の一つの指標となる経験が得られた、と考

えています。

全日本、全日本、全日本

3 月から 5 月にかけては、立て続けに迎えた 2 つの全日本大会を通じて多くのことを学びました。11 月には、11 日に三重県で全日本スプリントがあり、23 日から長崎県で 3 日間全日本トレイル、全日本リレー、全日本ミドルが続くという、この春以上の「全日本大会ラッシュ」が待っています。(筆者はトレイル 0 でも、過去に全日本 4 位を経験している知人ぞ知る? 実力者です。)

私事ですが、満 40 歳を越えて迎える全日本シリーズですので、一つの重要な区切りをとらえ、春同様に勢いを付けて臨みたいと考えています。

読者の皆さんにも、日本のオリエンテーリング界にとって記念すべき月となることは間違いない 11 月に向けて、練習を積んでいただければ(そして時間と遠征費のやりくりをしていただければ)、と望んでいます。

(本稿の前半部分、全日本スプリントについての記述をする上では、元強化委員長である宮川達哉氏からの指摘を参考にしています。この場を借りて御礼申し上げます。)

(松澤俊行)



＜松澤俊行プロフィール＞

1972 年静岡県生まれ。5 月に行われた全日本大会で、8 年ぶり 3 度目の男子全日本選手権者となる。その結果を受けて、11 度目の世界選手権日本代表チーム入りも決定した。

イチオン大会アジア選手権番外編

アジアの頂点へ

松澤俊行

一昨年、ホームでのアジア選手権で好結果を残した日本チーム。一方で、女子シニアや男子ジュニアでは、全個人種目で日本人トップ選手が中国人選手に惜敗と、悔しい思いも残った。

今年の開催地は中国、無錫。完全アウェイとなる闘いでは、さらなる苦戦、死闘が待っていることだろう。もちろん、アジア選手権者を目指す選手たちは、そうした厳しい状況を乗り越える覚悟を持って、日々トレーニングに励んでいる。

ここで、日本開催の前回大会で、アジア 40 億人民の頂点に立つナヴィゲーション能力を発揮し、ロング種目チャンピオンとなった小泉成行選手の話に耳を傾けてみよう。

「アジア選手権はその言葉通りアジアのライバルと競える身近な国際大会です。ヨーロッパに限らず海外のマップを手にしてオリエンテーリングをするということは、世界での活躍のためにも重要な経験ですが、なにより未知の土地を巡るというオリエンテーリング本来の楽しみを思い起こさせてくれ、とても刺激的です。」

残念ながら今年のアジア選手権はロング種目が実施されない、との情報がある。ロング種目連覇はお預けとなった小泉選手も、他個人種目の制覇とリレー連覇を狙いに行く意欲を見せている。年代別上位を目指して大会に臨む各世代の日本人競技者からの声援が、小泉選手をはじめとする選手権クラス出場選手たちの背中を押すことだろう。

最後にもう一言、小泉選手から O マガジン読者に向けたメッセージを紹介しよう。

「もはや日帰り圏内とも言われる上海近郊での大会、ぜひ多くの方々と遠征できればと思っています。」

多くの関係者が小泉選手のメッセージに応えてくれれば、無錫が日本チームにとってホーム同様の環境となり、前回以上に代表選手たちの活躍が見られることだろう。

(松澤俊行)